

動物病院から 秋田の動物園60年 「動物病院の歴史」

獣医師 三浦 匡哉

秋田に動物園が出来て今年で60年。その間、動物病院や獣医師にも様々な歴史がありましたので、みなさんにご紹介します。

千秋公園時代の昭和32年～36年(1957～61)には囑託の獣医師が、昭和38年～43年(1963～68)は園長が兼務していました。ところが、園内に病院施設はなく、獣医師が不在の時は、秋田県中央家畜保健衛生所や市内の開業獣医師に治療等を依頼していました。(下記表※部分)

大森山に移ってからしばらくの間、動物病院は総合動物舎(猛獣舎)の中に間借りし、人が檻の中で、ライオンの人工哺育等をしていました。

その後、昭和51年(1976)頃には園内の当時の育雛室を、昭和61年(1986)頃には当時の越冬舎を職員手作りで改造し、病院として使っていました。動物病院の機材も、人の病院等のお古や自家製の器具を使うことが多く、文字通り、手作り感の強い施設でした。

平成20年(2008)には動物病院が新築され、現在に至っています。ここでは来園者に治療の様子や一部の入院動物を公開することで、動物の生死を考え、「いのち」を感じることでできる新たな視点を有する施設として、動物園としての新たな可能性を探っているところです。

場 所	千秋公園		大森山				
	年代	'50～'73	'73～'89	'89～'99	'99～'04	'04～'09	'09～
獣医師数	※	1	2	3	4	5	

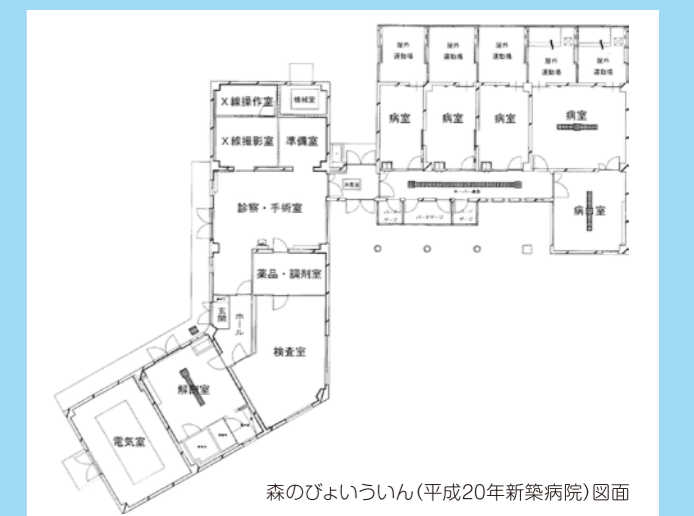
獣医師数の変遷



ライオンの人工哺育



旧病院の診療室



森のびょういん(平成20年新築病院)図面



飼育レポート 1

6月8日撮影。かわいい盛りです

飼育展示担当 泉 弘美

タンチョウのペアの間に、当園で初めてヒナが2羽生まれました。昨年は産卵(2個)はしましたが、2個とも無精卵だったためふ化はしませんでした。

今年は繁殖への取組として、ツルを担当した事のある職員の見解で、交尾をしやすくするために、ペアの総排泄孔周囲の羽根をカットしました。その成果がふ化に繋がったのではないかと思います。

産卵、ふ化後の状況、現在の様子をご紹介します。4月20日に1個目を産卵し、3日後2個目を産卵しました。2個目の産卵後、抱卵し始めましたが、抱卵日数である30日が過ぎてもふ化せず、35日目に以前ツル担当だった職員に卵を取り上げる事(抱卵日数が長ければ長いほど、動物に負担がかかるため)を相談した所、40日目まで待つことにしました。そして37日目になる5月27日正午頃、2羽のヒナがふ化しました。ふ化して羽が乾くと、2羽ともよちよちですが歩き始めます。ヒナの世話はオスとメスの両親で行い、餌を口うつしで食べさせていました。

しかしその1週間後、残念ながら1羽のヒナは亡くなってしまいました。原因としては、餌を上手に食べる事ができなかった、もともと弱い個体だったなどが考えられますが、担当する自分の飼育管理にも責任を感じます。育てるのは親ツルですが、もう1羽のヒナ(「チルチル」と名付けました)が無事巣立つため、餌を工夫し、観察に時間をかけ飼育担当の自分ができる事をと考える矢先、7月上旬からの猛暑でヒナは体調を崩し、8月下旬までの約2ヶ月近く治療をしました。治療の甲斐あり体調もよくなり、9月現在、親鳥とほぼ同じ大きさまで成長しました。夏がもうじき終わり今度は冬を迎えます。寒さには強く長寿のタンチョウですが、この冬も無事過ごし、1年無事育つようお願い、飼育にあたっていきたくと思います。



6月19日撮影



9月25日撮影。親とあまり変わらないくらいに大きさに



飼育レポート 2

ヨーロッパフラミンゴ。色が薄い方です

飼育展示担当 佐々木 美千代

今年の7月23日にヨーロッパフラミンゴが、7月29日にはチリーフラミンゴがそれぞれ1個ずつ産卵しました。当園のフラミンゴはここ20年以上産卵しておらず、フラミンゴを担当して3年目で待望の産卵です。

巣材の土台となる土の調合をしたり、餌を繁殖用に変更したり、なんといっても彼らの繁殖リズムを一から作り直すこと、彼らが安心して巣をつくり産卵・育雛できる環境を作ってあげることが一番の近道ではないかと思ひ、様々な準備を整えたところ、ついに産卵しました。

うまくいけば30日後にはふ化する予定でしたが、7月30日の朝、チリーフラミンゴの卵が抱卵2日目ではなくなっていました。親は巣の周りを何時間も探していました。おそらく、自分たちで間違っって割ったものと私たちは考えていましたが、翌日その正体が判明しました。

31日夕方、急にフラミンゴが騒がしく、何かに警戒して鳴いていたのです。見ると、親の目の前でヨーロッパフラミンゴの卵をヘビが食べようとしていました。全くの予想外の出来事です。すぐにヘビを捕獲し、偽卵と交換しました。本物の卵はふ卵機へ入れ、変わりに偽卵を親に抱いてもらい、ふ化する数日前に偽卵と交換する作戦です。

翌日、ヨーロッパのペアは偽卵を抱いていましたが、本物の卵はヘビによる破損が激しくふ卵機に入れてもふ化が難しく、今回は残念ながらふ化までいたることができませんでした。今回の産卵はフラミンゴも、私自身もとても悔しい思いをしたので、来年こそは待望のヒナが見られるように、さらに頑張りたいと思います。



真ん中の岩の陰で座っているのが抱卵しているメス。すぐ左に立っているのがペアのオス



チリーフラミンゴ。ヨーロッパに比べて色が鮮やかです



飼育レポート 3

フライングケージで泳ぐ水鳥

飼育展示担当 細田 真司

動物園では空からやってくるカラスに悩まされています。動物の餌をつまみ食いしたり、卵を持ち去ってしまいます。私が担当している鳥この水辺でも、モモイロペリカン以外の水鳥の餌(水鳥用ペレット、パン)を食べに、カラスがどこからともなく現れます。その数、多い時は30羽以上にもなります。

そのためにカラスに食べられずに水鳥が食べられるようなエサ入れ(以下、イカダと呼ぶ)を作ろうと考えました。カラスは水鳥と違って足に水かきがないために、水面を泳ぐことが出来ません。そこを利用し、水面に浮かぶイカダを製作しました。(下記写真参照)

池に浮かべると、思ったよりもイカダについた浮きの浮力が強すぎたため、イカダが上がりすぎて、餌をついばむことが困難なようでした。そこで重りを付け足し、沈ませて改良をくわえました。それでもまだ水鳥達は、イカダに餌があるという認識がなく警戒してしまい、カラスよけが水鳥よけにもなってしまう、悩みの種ですが、時間をかけて慣らしていきたいと思います。

それから、今年度からペリカンのまんまタイムを始めました。イベントがあるときに行っています。普段見ることのできない、ペリカンの給餌風景をどうぞご覧ください。



カラス対策用のイカダ



ペリカンのまんまタイムの様子